群馬県立土屋文明記念文学館
Gunma Prefectural Museum of Literature in Commemoration of Bunmei Tsuchiya

小学生の短歌教室

～伝統的な言語文化に親しむ～

副読本

二〇二一年十一月 発行
（二〇一四年十一月 第三刷）
編集・発行：群馬県立土屋文明記念文学館
協力：高崎市立上郊小学校
参考：今野寿美
『作ってみよう らくらく短歌』
『読んでみよう わくわく短歌』
（ともに二〇〇〇年、偕成社）

短歌の五七五七七の三十一音を三十一文字と呼ぶことがあります。はじめの五七五を「上の句」、後の七七を「下の句」といいます。五七五はそれぞれ「初句」、「第二句」、「第三句」、七七は「第四句」、「結句」といいます。音が多いのが「字余り」、少ないのが「字足らず」です。小さい「っ」や「ん」、カタカナなどを長くのばす「ー」も一音ですが、小さい「ゃ」「ゅ」「ょ」は数えません。短歌一首は、ことばとことばの間を空けたり行を変えたりしないでつなげて書くことが基本です。

土屋文明の短歌を読む

群馬が生んだ歌人・土屋文明（一八九〇ー一九九〇）

土屋文明は、群馬県西群馬郡上郊村（今の群馬県高崎市保渡田町）に生まれ、「アララギ」という短歌のグループのリーダーとして活躍した歌人（短歌を作る人）です。日本で一番古い歌集（短歌などの歌を集めた本）である『万葉集』の研究も熱心に行いました。文化勲章を受章し、群馬県名誉県民になり、百歳まで長生きしました。

県立文学館ホームページ「土屋文明ってこんな人！」を見ると、その人生がよく分かります。

土屋文明

文明の短歌を一首だけで読む、詞書と合わせて読む、歌集として読む…

短歌が一首だけで発表されることは、ほとんどありません。雑誌に数種から数十首ぐらいまとめて発表され、それが後で歌集にまとめられる場合がほとんどです。（マンガがはじめ雑誌に発表されて後で本になるのと似ています。）歌集の中では、いくつかの短歌をまとめて、その前に「詞書」と呼ばれる、状況を説明する言葉や文章が入ります。短歌には、一首だけ抜き出して読む魅力もあれば、詞書、歌集といった単位でまとめて読む魅力もあるのです。

特徴のある一首を読んでみよう！

土屋文明（第三歌集『山谷集』（一九三五年））

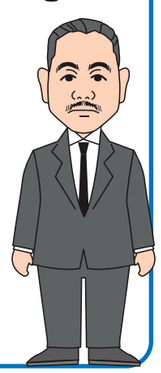
「小工場に酸素熔接のひらめき立ち砂町四十町夜ならむとす」

（しょうこうじょうに さんそようせつの ひらめきたち すなまちしじゅっちょう よるならんとす）七八六九七

【意味】小工場に酸素溶接（の光）がひらめきたち、砂町四十町は夜になろうとしている。

※砂町は東京東部の地名で、東京市城東区（現在の東京都江東区）にありました。その中の地名「四十町」は今の江東区東砂8丁目のあたりです。

東京の下町の小さな工場で、金属を高い温度にして溶かしてつなぎあわせる「溶接（熔接）」作業をしているところを詠んだ短歌です。土屋文明には、こうした工場などの機械的なものを詠んだ短歌があって、これは当時、かなり新しいものでした。



一つの詞書に続く短歌を全部読んでみよう！

一つの詞書の後に続く短歌のまとまりである「一連」をすべて読んでみることにしましょう。

土屋文明の第九歌集『青南集』（一九六七年）の中で詞書「私注稿了」に続く五首

※「私注稿了」という詞書は、文明が「『万葉集私注』という本（全二十巻）の原稿を書き終えた」という意味です。『万葉集私注』は、万葉集について文明が自分の意見を述べた本です。

宝字三年注しをへたり今ぞ切る三年前のマニラ一本

（ほうじさんねん ちゅうしおえたり いまぞきる さんねんまえの まにらいっぽん）七七五七七

【意味】天平宝字三年（西暦では七五九年二月二日～七六〇年一月二十二日）の歌に、自分の意見を付け終わった。今こそ三年前に手に入れたマニラ産たばこの封を切って一本吸おう。

鉄ペンも得難き時に書き始め錆びしペンの感覚今に残れり

（てつぺんも えがたきときに かきはじめ さびしぺんのかんかく いまにのこれり）五七五十七

【意味】この「私注」は鉄ペン（ペン先が鉄でできた万年筆）を手に入れることが難しかった時に書き始めた。（新しいものを買えなかったので）さびたペンで書き続けた。（その感覚が手に）今も残っている。

浅葱の枯れて野びるはかじかまり吾が腰抜ける二月近づく

（あさつきの かれてのびるは かじかまり あがこしぬける にがつちかづく）五七五七七

【意味】（ネギの一種）アサツキが枯れ、ノビル（という植物）が寒さでかじかんだようになり、私の腰が抜ける二月が近づく。

年々の足の立たなくなる二月恐れて冬のひよこを買はず

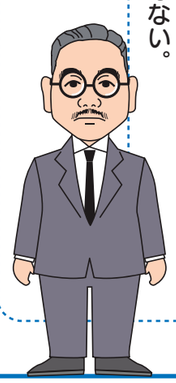
（としどしの あしのたたなく なるにがつ おそれてふゆの ひよこをかわず）五七五七七

【意味】毎年足が立たなくなる二月が心配で、（世話ができなくなることがないように）冬のひよこを買うことはない。

金柑の貝殻虫を落したり温かき日はただたのしくて

（きんかんの かいがらむしを おとしたり あたたかきひは ただたのしくて）五七五七七

【意味】キンカンについたカイガラムシを落としたりして（過ごす）暖かい日はただたのしい。



五首並べて読んでみると、直接「私注」と関係があるのは最初の二首だけで、あとの三首は、同じ時期の他のことを詠んでいます。こうすることで、「私注」を書くことが文明の普段の生活の中に深く入り込んでいたことや、その時間の厚みのようなものが伝わります。**一首ずつは地味でも、歌集を読む流れの中での、まとまりとしての魅力を感じることができる**のです。